主題：パウロの書簡における真理の重要な項目
——コリント人への第一の手紙

メッセージ　9

偶像礼拝から逃れて至聖所の幕の内側に入り、
宗教の営所の外に出ることによって、
主と親密で彼の心を知る人たちとなる

聖書：Ｉコリント 10:1-14．出 33:7-11．民 14:9．士 24．ヘブル 6:19-20．13:13

Ｉ．コリント人への第一の手紙は旧約のイスラエルの子たちの歴史を新約の信者たちの予表としています——10:1-13：

Ａ．Ｉコリント第 5 章 7 節から 8 節において、信者たちはキリストを彼らの過越として経験し、パン種のないパンの祭りを守り始めます。

Ｂ．第 10 章において、彼らは彼らのモーセ（キリスト）へとバプテスマされ、彼らの紅海（キリストの死）を渡ります——1-2 節。

Ｃ．彼らは今や、彼らの霊の食物としてのキリストを食べ、彼らの霊の飲み物としての彼を飲んでいます（3-4 節）。それは、彼らが自分たちの良き地（すべてを含むキリスト）に向かう彼らの行程を行くためです。また、彼らは 6 節から 11 節で描写されているように、神に逆らって悪を行なったイスラエルの子たちの歴史を繰り返さないようにと警告されています。

Ⅱ．神がイスラエルの子たちを召した目標は、彼らが約束された地に入って、その豊富を享受し、神の王国を設立し、地上で神の表現となることでした——出 3:8，14，17：

Ａ．　しかしながら、全イスラエルは過越を通して贖われ、エジプトの虐待から救い出され、神の山にもたらされて、神の住まいである幕屋の啓示を受けましたが、ほとんどすべては荒野で倒れて死に、この目標に到達することができませんでした（ヘブル 3:7-19）。それは、彼らの悪い行ないと不信仰のゆえでした。

Ｂ．このことが表徴しているのは、わたしたちがキリストを通して贖われ、サタンの束縛から救い出されて、神のエコノミーの啓示にもたらされても、神の召しの目標に到達すること、すなわち、わたしたちの良き地であるキリストの嗣業に入って、神の王国のために彼の豊富を享受し、現在の時代に彼の表現となり、王国時代にキリストの完全な享受にあずかることに、失敗するかもしれないということです——マタイ 25:21，23。

Ｃ．これは新約のすべての信者たちに対する厳粛な警告であり、特にコリント人に当てはまります。彼らには、荒野でのイスラエルの失敗を繰り返

す危険性がありました。

D．カレブとヨシュアだけが目標に到達し、良き地に入りました。カレブとヨシュアのように、わたしたち新約の信者は「目標（キリストを極みまで享受し獲得すること）に向かって追い求め」、「賞（千年王国におけるキリストの完全な享受）を得る」必要があります――民 14:27-30．ピリピ 3:12-14：

1．モーセが良き地に斥候として遣わした十二人のうち十人が悪い報告をしたことは、イスラエルの子たちをつぶやかせ、主の言葉に背かせました。しかし、カレブとヨシュアは全会衆に言いました、「ただ、決してエホバに背いてはなりません．その地（アナク）の人々を恐れてはなりません．彼らはわたしたちの食物であるからです」――民 14:9。

2．神の言葉はわたしたちのパンであり（マタイ 4:4）、神のみこころを行なうことはわたしたちの食物であり（ヨハネ 4:34）、わたしたちの食物はまたアナク人でもあります（民 14:9）。アナク人は、わたしたちがキリストを追い求めて召会を建造することにおいて、一見して打ち勝つことができない障壁と不可能な状況を表します。

3．サタンがわたしたちの道に置くあらゆる困難と誘惑は、わたしたちにとって食物です。これは、霊的進歩のために神が定めた手段です（Ⅰテモテ 4:15-16）。もしわたしたちが勝利のために主に依り頼み、彼の勝利を得る命がわたしたちの中で表されることを許すなら、わたしたちは新鮮な養いと活力が増し加わるのを見いだすでしょう。

4．カレブは八十五歳の時、主が彼を四十五年間生き長らえさせてくださったと言い、「今日わたしはなおも、モーセがわたしを遣わした日のように強健です．戦いにも、出るにも入るにも、わたしの力は今も、あの時［四十歳の時］のように力があります」と宣言しました――ヨシュア 14:11。

5．神の守る力を持つために、わたしたちは信仰の霊を活用し、わたしたちの心を主に向け続けて、彼の約束を心から信じ（Ⅱコリント 4:13．3:16．1:20）、彼が彼の民と共におられることを信じ、彼の民は必ず打ち勝つことができると信じなければなりません（ヨシュア 14:12-15．民 13:30）。わたしたちは魂を担保として神、信実な創造主にゆだね（Ⅰペテロ 4:19）、自分自身を彼に明け渡し、わたしたちの命を守ってくださるよう彼にゆだねなければなりません（Ⅱテモテ 1:12）。

6．もしわたしたちが彼の約束を信じ、自分自身を完全に彼にゆだねるなら、この日から彼が戻って来られる日まで守られるでしょう。彼はわたしたちをつまずきから守り、わたしたちを傷のない者として、大いなる歓喜の中でご自身の栄光の前に立たせることができます――ユダ 24 節。

Ⅲ．パウロが「偶像礼拝から逃れ」るようにコリント人に警告したのは（Ⅰコリント 10:14）、金の子牛を拝んだことにおけるイスラエルの子たちの偶

像礼拝について言及することによってです（出 32:1-6）。パウロは彼らに言いました、「また彼らのある者のように、偶像を拝む者となってはいけません．『民は座して食べ飲みし、立って戯れた』と書かれているとおりです」（Ｉコリント 10:7）：

Ａ．金の子牛は、神の贖われた人々によって造られた偶像であり、立って戯れることは酒宴にふけること（あるいは羽目を外したお祭り騒ぎ）です。わたしたちの心の中の偶像とは、何であれわたしたちの内側にあるもので、わたしたちが主以上に愛するもの、またわたしたちの生活において主に置き換わるものです（エゼキエル 14:3）。真の神の真の子供たちとして、わたしたちは偶像から、わたしたちの生活におけるキリストのすべての代替と置き換えから自分自身を守るように警戒している必要があります（Ｉヨハネ 5:21）。

Ｂ．わたしたちは金の子牛の偶像、すなわち神の贖われた民が造った偶像が、彼らを偶像礼拝の営所としたという原則によって警告される必要があります。偶像礼拝は五つの原則を含みます――Ｉコリント 10:5-7：

１．自己を美しく見せることは、偶像礼拝へもたらします（出 32:1-3: 33:5-6．創 35:2-4）。神がわたしたちの美しさであり、彼は彼の美の家としての召会を美しくしています（イザヤ 60:7，19，21．エペソ 5:26-27）。わたしたちの自己の表現の中には分裂がありますが、神の団体的な表現の中には一があります（ヨハネ 17:22-24）。わたしたちの働きは、わたしたちが地上で神の栄光を現し、神を表現する生活であり（4 節．Ｉコリント 10:31．イザヤ 43:7）、わたしたちは語ることにおいて、自分の栄光を求めて自分自身を宣べ伝えるのではなく、キリスト・イエスを主と宣べ伝え、また、わたしたち自身がイエスのための信者たちの奴隷であることを宣べ伝えるべきです（ヨハネ 7:17．Ⅱコリント 4:5）。

２．偶像礼拝は、神がわたしたちに与えたものをサタンが横領して、それを浪費させることです。それは、神がわたしたちに与えたものを乱用することであり、物質のものであれ霊的なものであれ、神の賜物を神の目的のために用いないことです。イスラエルの子たちがエジプトから脱出する前、エジプト人を通して神によって与えられた金は、幕屋の建造のために用いられるはずでした。しかしながら、金は神の目的のために用いられる前に、サタンによって横領され、神の民が偶像を造るために用いられました――出 11:2-3．12:35-36．25:2-8．35:4-9。

３．偶像礼拝は、わたしたちが楽しんでいるものを礼拝すること、すなわち享楽、娯楽を礼拝することです。そうです、わたしたちは主の享受を持っていますが、これはこの世の享楽、娯楽の形ではありません――32:6，18-19．参照、詩 36:8-9。

４．偶像礼拝には、真の神を礼拝しているという見せかけがあります――

出 32:4-6．列王上 12:26-30．参照、マタイ 4:8-11．ヨハネ 4:23-24。

5．偶像礼拝は、礼拝の中に混合があります――出 32:4-6，21-24．参照、Ⅰコリント 3:12。

C．イスラエルの子たちが金の子牛を拝んだ後、モーセは、主の臨在がもはや民のただ中にないことを認識したので、彼の天幕を移し、営所から離れた所にそれを張りました。そして彼の天幕は神の天幕となりました。なぜなら、主の臨在と語りかけがそこにあったからです――出 33:7-11：

1．営所は宗教的な人々を表徴しています。それは、彼らが主に属しているのは名ばかりで、実際は偶像を拝み、主ご自身以外のものを拝み、尋ね求めていることを表徴しています。

2．神の民の歴史の中で、営所は三つの時期に見られます：

a．営所はまず、金の子牛を拝んだ後のイスラエルの子たちでした。

b．主が地上で生活していた時、ユダヤ宗教は営所となりました。

c．後ほど、召会は性質を、天幕であることから営所、すなわち宗教組織、宗教のバビロンに変えました。それは一組の宗教的な人々で構成されています。彼らが主に属しているのは名ばかりで、口では主を尊んでいても、心を主以外のものに置いています――創 11:4，7，9．啓 17:3-5．18:2 前半，4．マタイ 15:7-9.

D．モーセが彼の天幕を移して、それを偶像礼拝の営所から分離した後、人が自分の仲間に語るように、主は顔と顔を合わせて彼に語りました（出 33:11）。神とモーセは仲間、同僚、パートナーであり、同じ働きにかかわり、大いなる事業の中で共通の権益を持っていました。モーセは神と親密であったので、神の心を知る人であり、神の心にかなう人であり、神の心に触れることができた人でした。

Ⅳ．ヘブル人への手紙の目標と究極の結論は、わたしたちが幕の内側に入り、営所の外に出ることです――6:19-20．13:13:

A．キリストにとっては、宮の中の垂れ幕（彼の肉を表徴する）は裂かれましたが（マタイ 27:51）、信者たちにとっては、神が彼らを対処する目的のために肉は依然として残っています。

B．わたしたちは依然として肉体の中で生きているので、キリストの死によってすでに裂かれた第二の幕を通ることによって、完全な方法で神に和解させられる必要があります。至聖所の中に入ることは、わたしたちの霊の中で生きることです――Ⅱコリント 5:18-20。

C．わたしたちは幕の内側、すなわち至聖所としてのわたしたちの霊の中で生きる必要があります。それはわたしたちが神の新創造として彼の復活を経験した後、わたしたちの肉を対処することにおける十字架のさらに強い経験を持つことを通してです――雅 4:12-15．6:4 前半．ローマ 8:6．ガラテヤ 6:15。

D．わたしたちは幕の内側に入り、偶像の営所の外に出て、主との最も近い、最も親密な関係を持つ必要があります。それは、わたしたちが神と一となり、彼の永遠のエコノミーを遂行するためです――ヘブル 6:19-20．13:13．Ⅰテモテ 1:3-4，18。

E．幕の内側に入るとは、主が栄光の中で御座に着いている至聖所の中に入ることを意味します。営所の外に出るとは、主が拒絶されて追い出された宗教から出て来ることを意味します。宗教は地的な領域であって、人々を神のエコノミーから遠ざけます。宗教的であるとは、キリストの臨在なしに高潔で聖書的で根本的であるということです。

F．わたしたちはわたしたちの霊の中にいなければならず、経験的に言って、今日、実際の至聖所はわたしたちの霊の中にあります（エペソ 2:22．Ⅱテモテ 4:22）。わたしたちはまた宗教の外にいなければならず、今日、実際の営所は宗教の中にあります：

1．わたしたちは霊の中にいて天のキリストを享受すればするほど、ますます宗教の営所の外に出て、苦難を受けたイエスに従います。わたしたちは霊の中にとどまって、栄光の中にいる天のキリストと接触すればするほど、ますます宗教の営所の外に出て、卑しめられたイエスへと行き、彼と共に苦難を受けます。

2．真の新約の務めはわたしたちを、霊の中の、すなわち幕の内側の、キリストに対する享受へともたらし、またわたしたちを強めて営所の外でイエスに従わせ、彼のからだのために彼の苦難の交わりにあずからせます――Ⅱコリント 11:2-3，23-33。

G．幕の内側で、わたしたちは天のキリストの務めにあずかり、装備されて、営所の外で渇いている霊に彼を供給します。わたしたちは、幕の内側に入り営所の外に出ることによって、神のみこころを行なうために、あらゆる良いわざをもって成就されます。この神はご自身の目に喜ばれることを、わたしたちの中で行ないます――ヘブル 13:20-21。

© 2023 Living Stream Ministry